

「文部科学省特色ある大学教育プログラムシンポジウム  
ケースメソッド授業とケース教材」

場所：慶應義塾大学 三田キャンパス  
期間：3月13日（木）

2008年3月4日に慶應義塾大学で開催された文科省特別GPシンポジウム「ケースメソッド授業とケース教材」に参加してきた。以下では、徒然なるままに、当該シンポジウムについての感想などを述べることにしたい。

### 1.シンポジウム概要

まず、本シンポジウムの当日の流れを報告する。

9時から9時15分 開会挨拶

9時15分から10時 オリエンテーション

10時から10時半 グループディスカッション「学校の声が聞こえてこない」、「青梅慶友病院と大塚宣夫」の2つのケースを使用

10時40分から12時20分 ビデオ視聴によるクラスディスカッションの疑似体験「学校の声が聞こえてこない」、「青梅慶友病院と大塚宣夫」

12時10分から13時 質疑応答

14時から14時50分 講演：ケース教材の選び方と使い方

14時50分から17時 シンポジウム「様々な教育領域でのケースメソッド授業」

上に示したように、本シンポジウムは朝9時から夕方5時までの長丁場であった。しかし、本シンポジウムは、中だるみすることもほとんどなく、最後まで興味深いプログラムで展開された。

### 2.ケースメソッドとは何か

開会あいさつ後に行なわれた、慶應ビジネススクール講師による「ケースメソッドとは」というオリエンテーションでは、そもそもケースメソッドとは何か、ケースメソッドの教育効果、ケースメソッド授業が重視しているキーコンセプトなどについて解説があった。ここでの解説が大変分かりやすく、かつ、興味深いものであった。

オリエンテーションで示された興味深いことをいくつかあげてみよう。

まず、ケースメソッドとは、参加者が自ら学び、既存の知識の獲得ではなく、考え抜いて編み出す能力や態度の獲得が目的の授業の方法である。そして、ここで用いられる教材ケースは討議の引き金になるものであり、一方、ケーススタディのケースは研究成果物であって同じケースという語を用いても、それらの中身は異なるものである点が強調された。（ちなみに慶應のビジネススクールの場合、教材ケースであっても、研究成果物のケースであっても、研究教育業績として認められているという。愛知大学でも、教材ケースを業績として是非、認めていただけたらとも思う。）

次に、ケースメソッドの教育効果である。ハーバードではケースメソッドに参加する際のコンセプトが次のように教えられるという。それは、「勇気」、「礼節」、「寛容」である。ケースメソッド授業に参加する学生は、主体的に、また、積極的に、つまり勇気を持って発言しなければならない。また、礼節と寛容な心を忘れずに議論をしなければならないというのである。ケースメソッドから得られる教育効果は、ケースを理解することではない。ケースメソッドでは、他人の意見に耳を傾け、自分が気づかない思考を他人から学ぼうということに力が注がれているということであった。

### 3. ケースメソッドの疑似体験

オリエンテーションの後は、グループディスカッション、ビデオの視聴へと続く。この2つも大変興味深かった。とうのも、本シンポジウムに参加するに当たり、事前に主催者から2本のケースが送られてきて、予習が課されていたからであった。事前に送られてきた2本のケースは、「学校の声が聞こえてこない」、「青梅慶友病院と大塚宣夫」であり、設問も添付されていた。

私自身、大学院時代にケースメソッドの授業をいくつか受け、またケースメソッドで展開される授業の講師を務めたことがあったものだから、かかる予習には随分気合が入った。予習で示されたケースは対照的なものであった。1つ目の「学校の声が聞こえてこない」は、架空の大学院が舞台のケースで、その学校の大学院生の側から見た大学の不十分さを指摘するものであった。このケースに書かれていた学生が感じる大学の不十分さをまとめると、「この学校は学生をどのように育てたいのか分からない。」ということであった。学生が感じているのは、教育理念と実際との乖離、科目間のちぐはぐさ、教員間の能力のばらつき、校長のリーダーシップ不足といったことが、大学が学生をどのように育てたいのか分からずに、学生としてはフラストレーションがたまるということであった。

一方、青梅慶友病院のケースは、先の大学とは対照的で、「病院はサービス業」という院長のモットーのもとに、「すべては患者様のためになされる」という患者第一主義が組織内に徹底されていることが示されていた。

この2本のケースを両方読んだ上で、大学では病院同様の学生第一主義が成り立つのか、あなたの意見をまとめよという課題であった。(余談ではあるが、学内でこの2つのケース2本を使った勉強会を開いてみるのも面白いかもしれない。)

かかる課題の答えを持って、オリエンテーション後のグループディスカッションに参加した。これは、当日会場で近くに座った5人1組でグループを作り、先の課題について他の意見を聞きあうというものであった。(ここで気づいたのだが、日本福祉大学の教員が数十名参加していた。日本福祉大学は教育での改革も企んでいるようである。ちなみに愛知大学からの参加者は私一人。)

グループディスカッション後に見た、慶應ビジネススクールでのケース授業のビデオが大変興味深かった。我々が予習したものと同一ケースを使った講義をビデオで疑似体験したのである。ケースの授業では、教員は何かを教えるのではなく、ディスカッションのリードに徹する。まず、教員は、ケースの2つの組織の特徴を、学生に次々に言わせ、それを、まとめるように板書していく。この板書の量が半端ではなく、膨大で、また好き勝手に話す学生のポイントを上手にすくいにとって黒板にまとめていた。とはいっても、ケースメソッドでは、用いられるケースごとに、教員の伝えたいポイントもあるので、学生の意見を黒板に書く際も教員の意図が反映されたものになっていく。2つの組織の特徴を浮き彫りにした後、大学では学生第一主義が成り立つのかを学生に聞いていく。それも先に黒板に書かれた組織の特徴を踏まえた議論がなされるように教員がリードして言ったのである。

ケースメソッド授業では、教員は何かを教えない。学生の発言を促し、それをまとめていくのである。発言をまとめる際に、どうまとめていくかも学生に聞いていた。この2つの概念はどうつながるのかといった具合にである。また教員は学生の発言を否定することもない。授業が終わるところになると、なんとなく、クラスの結論が見えてくる。大体意見が出尽くしたところで授業が終わる。教員が講義内容を最後にまとめ、こういうことを学んで欲しいということを示すことはなかった。

ビデオでケース授業の疑似体験をしたあとに、当該授業を行なった教員が会場からの質問に答えた。担当教員がこの授業で伝えたかったのは、組織の目的を達成するには、組織の仕組みが重要だということらしい。組織目標を達成するための阻害要因を洗い出すことで、組織の仕組みを変えていくことにつながるのだろう。

### 4. シンポジウムに参加して学んだこと、気づいたこと。

今回のシンポジウムで学んだことの中で、最も自分に役立ちそうなことは、ケースメソッドに限らず、教室では学生も私も「勇気」、「礼節」、「寛容」でいるということであった。

私はどうも怒りっぽい性格で、講義でもゼミでも、ついつい学生を怒ってしまう。それもかなり威圧的に押さえつけてしまうことが多い。これでは、学生も楽しくないだろう。来年度からは、「勇気」、「礼節」、「寛容」が私のクラスに漂うようにしたいと思う。

今回のシンポジウムは盛りだくさんで、上に詳述した以外の話も多く聞いた。学部でケースメソッド授業をやっている先生が、ケースメソッド授業は学生からの人気も高いということを書いていた。とはいっても、ケースメソッドの授業のはじめの1,2回は学生も戸惑うらしい。なぜならば、何か答えを教えてくれるわけではないから。しかし、3回4回もやっていくと、主体的に考え、議論し、他人の意見に耳を傾けるということが面白くなっていくのだという。

愛知大学でも、このケースメソッドという手法の授業がいくつも可能であろう。とりわけ、法学やビジネスに関連する授業で採用してもいいのではないだろうか。なぜならば、実学の範疇に入る学部では、実務に関する問題を見つけ、それを解決し、議論しまとめあげていくという能力を養うことが重要だからである。もちろん、すべての科目がケースメソッドを使う必要はない。しかし、ケースメソッドを採用した授業が複数開講されることでこの方法自体が学生に浸透していくのではなからうか。そうすれば、きっと学生も楽しみながら授業に参加してくれるはずである。

私は愛知大学でケースメソッドの授業をやって大失敗した苦い経験がある。それは、「マーケティング戦略論」という科目でのことである。タイトルの響きから、そしてケースメソッドを使った興味深い授業方法から、大人気講義になるだろうという予感があった。しかしである。毎週予習があり、少人数で展開するというのを売りにしたこのクラスを、学生がほとんど履修しないのである。愛知大学の学生は主体的に考え何かを発していくことにすら関心がないのか。ケースメソッドの授業をやるには、この方法を採用したクラスを複数開講するとともに、学生の士気をまず高めねばならないのかもしれない。

最後に、シンポジウムに参加して分かったケースメソッドの怖さについても書きたい。大学教育というのは、文系理系どの学部であっても、論理的な思考を学生につけさせることを目的としているはずである。しかし、ケースメソッドでは、学生にそれが身につくか甚だ怪しい。ビデオでケースの疑似体験をしたのだが、学生は決して論理的に意見を言っているような印象は受けなかった。さまざまな角度から次々に意見が出るのは非常に新鮮で面白い(それをまとめる教員は必死だ)が、学生の意見に一本筋の通ったきれいな論理が見えないのである。ビジネススクールは大学院だから、受講生たちは、事前に論理的にケースを予習してきているのだろう。しかし、実際のクラスディスカッションでは、その論理を忘れている。これを学部生相手に展開することに意味があるのだろうか。そもそもケースを予習する際に論理的な分析が学部生にできるのであろうか。そのためには、事前に何を学生に提供すればいいのだろうか。ケースメソッドで、論理的ではない自分の意見を主張する学生を作る恐れはないのか。それが危惧す

学部長	FD委員長	FD委員会	企画・広報課長	係